

会員の声

日本公衆衛生雑誌53巻6号に掲載された
大熊和行論文についてキリアケ ヨシタカ
切明 義孝

日本公衆衛生雑誌53巻6号437ページに掲載された大熊論文（三重県における介護保険データを用いた健康余命の算定）は私の著作物を利用した疑いがあります。

まず、私が認識している経過および、私の立場について説明いたします。まず、大熊論文に掲載されたエクセルシートは私のホームページ (<http://home.att.ne.jp/star/publichealth/kenkou.htm>) に掲載しているものと類似性が非常に高いものです。axの数値は同一で、エクセルシート中の説明文もほぼ同じであり、計算式に関する本文の内容についても上記ホームページで紹介している私の著作物を利用したと思われる箇所が多数存在致します。論文ではこれを参考文献に基づいて考案したかのように説明していますが、参考文献を引いても該当する記述は導けず、著者は私の著作物を一部改変したものを自分の研究成果として発表したのではないかと感じました。

以上の点について、著者の見解を公の場で求めたいと思いますので、よろしく願いいたします。

日本公衆衛生雑誌53巻6号掲載された
論文についてオオクマ カズユキ
大熊 和行

貴誌53巻6号437-447頁（2006年）にご掲載頂きました論文（資料）「三重県における介護保険データを用いた健康余命の算定」の文献引用に関する過失につきましては、貴委員会及び切明義孝氏にご迷惑をおかけすることとなり、お詫び申し上げます。

本研究は平成13～15年度に行ったものですが、

切明義孝氏が平成14年12月12日付けでweb公開しておられました「介護保険制度を利用した健康寿命計算マニュアル」を拝見し、その内容はChiang法による平均余命算定と介護保険データを利用したSullivan法による健康余命算定であると理解しておりました。また、その当時、JOISによる各種文献検索を行ったところ、厚生統計協会発行の厚生指標46巻4号（1999年）に特集論文が掲載され、そのひとつ（本論文引用文献1）に「介護保険のスタートもあり、今後10年間程度は生活の自立度ないし要介護度測定を用いることが適切であろう。（中略）このため、算定にはSullivan法が適切となる。」と報告されていたほか、日本公衆衛生協会発行の平成13年度地域保健情報解析研修「健康日本21」地方計画策定研修テキスト48頁に「健康寿命の計算方法（サリバン法）として、生命表において、定常人口に寝たきりでない割合を掛けて新しい定常人口として平均余命を計算する。」とも紹介されていたこと等から、健康余命の算定方法としては”介護保険データを利用したSullivan法”という表記が一般的と理解いたしておりました。

しかしながら、今回の切明義孝氏のご指摘により、2004年1月に同氏のご発表されました論文（介護保険制度を利用した健康寿命の算出方法の開発：東医大誌 62(1): 36-43, 2004）を引用し、同氏のweb公開情報についても言及すべきであったと改めて確認いたしました。

これは、当初の文献調査時からかなり時間が経過していたにも拘わらず、論文投稿時に再調査を行わなかったことに起因するもので、当方の過失を認め、お詫び申し上げます。

なお、ax（年齢階級内平均生存期間割合）につきましては、切明義孝氏は0歳～85歳以上の年齢階級19区分で算定してweb公開していますが、本論文では、440頁右段の3の項に記述しましたように、第19回完全生命表（本論文引用文献18）をもとに、厚生統計テキストブック（本論文引用文献19）に示されている方法により、0歳～95歳以上の年齢階級21区分で独自に算定したことに相違ございません。